「いわての復興教育推進事業（交流学習スクール）」成果報告書

学校名：宮古市立田老第一中学校

## Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

本校では、東日本大震災において全校生徒 78 名の内、全壊及び半壊等の被害を受けた生徒は 30 名いる。生徒全体の 38%が震災の被害を受けた。地域としても大きな被害を受けており、震災から８年たった今でも仕事や住居等に影響を受けている家庭も多い。そのため、保護者の生活環境や心の状態に影響を受ける生徒も少なからず見られる。また、現在の生徒は震災当時、保育所年長～年少という年代であり、当時の記憶が曖昧である生徒がほとんどである。

これらの現状を踏まえて、今年度は学校経営の基本理念『田老一中「復興教育」～自ら、学び、伝え、活かす人づくり～』のもと、以下のような視点を持って復興教育を計画、実践した。

○目標

「震災の教訓に学び、夢や目標に向かって、自分から考え、行動できる生徒」

○復興教育8年目の取組（視点）

①記憶に頼った学びは曲がり角に来ていることを踏まえ、震災を知り、改めて震災を捉え直すこと

②防災･復興に向けて自分たちがするべきことを考えること

③学んだことを、自分たちのことばでまとめ、自分たちのことばで伝えること

④実際に学んだことや自分の思いをことばで終わらせず､学校生活を中心とした実生活で実践していくこと

震災から８年目を迎え、生徒の記憶に頼った復興教育は岐路に立っている。指導する側の教員も震災について学び、復興とは何か復興教育を通し身に付けさせたい力は何かを考えていかなければならない。

## Ⅱ　取組の概要

1　震災講話

視点①②に関わる学習活動である。本校では、毎年４月に１年生を対象に復興講話を行っている。ここから、田老一中の復興教育がスタートする。講師は、震災当時から本校に勤務する用務員さんである。震災の翌年（平成 24 年）から校内に設置されている、震災資料展示室「ボイジャー」の見学とあわせて行ってきた。

2　田老を語り伝える会

視点②③④に関わる学習活動である。震災講話で語られた「将来１つでも２つでも助かる命がある。そのために震災を語り継ぐ」ということを踏まえて、他者に「伝える」活動を行う。また，伝えるために改めて「学ぶ」ことを重視し、時間をかけて生徒たちは台本を準備した。震災当時はまだ幼かったため、当時の記憶がほとんどない生徒も多く、そのため、インターネット、ボイジャー室の資料活用など、さまざまな資料を通し震災や田老の歴史を学びなおした。また、生徒が保護者や地域の方を対象にアンケートを行い、当時の様子や防災に対する考えなどを多く知ることができた。これらの活動を通して、生徒たちが「田老を語り伝える会」の原稿をまとめ、様々な機会をとらえ外部に発信した。

今年度，2 年生は，八幡平市の西根一中と盛岡市の下橋中との交流会を行った。西根一中とは７月に本校を会場として行い、「田老を語り伝える会」をはじめ、各校の交流をとおして、田老の震災やそのときの様子、お互いの考えを交流したり深め合ったりすることができた。９月には交流学習スクールの支援を受けたことで、盛岡市の下橋中学校を訪問、交流会を実施し、その中で「田老を語り伝える会」を行うことができた。生徒たちは緊張しながらも真剣に取り組み、これまでの自分たちの学びを十分に

伝えることができたと思う。また、生活の文化の違いや、震災について意見交換することで、お互い防災に対する意識をより高め合うことができた。

また，３年生は今までの復興教育の集大成として、４月の修学旅行で東京都の桐朋中学校を訪問し、「田老を語り伝える会」を行った。当たり前な日常がどれだけ素晴らしいことか、互いに認識する機会となった。

３　文化祭での生徒会企画劇の発表

視点③④の学習活動である。田老漁協の方が学校にいらしたとき震災後、田老の漁業がどのように復活していったかの講話をいただいた。田老は漁業の町と認識されているが、そこに至るまでどんな苦労があったかを学んだ。また、今年度の修学旅行で豊洲市場を訪れた際に、「真崎わかめ」を扱っている「中嶋水産」の方から「真崎わかめは消費者から非常に好評である。しかし、真崎わかめが田老産であることは知られていない」という話を伺った。田老の復興のシンボルとして「真崎わかめ」を生産しているものの、認知度の低さが大きな課題であることに気付いた。

そこで今年度の生徒会企画劇は、田老に住む私たちが「真崎わかめ」や「漁業」について理解し、外へ発信できるようにすべきであると強く感じた。「真崎わかめ復活物語」と題し、文化祭で上演したいと考えた。毎年内容や場面を新たにしながら、故郷について知り、先人の想いに触れることを通して、命を守ることの大切さや復興の担い手の自覚を高めることを大きなねらいとして取り組んでいる。今年度は田老の現在と未来、これからのふるさと田老を描いたものになった。脚本、役者、演出、照明、音響全てを生徒会執行部が中心となり、生徒たちが試行錯誤しながら全員で創りあげた。そこには、いままでの復興教育で学んだ多くのことがらが反映されている。

４　学校外と連携した地域人材を活用した授業

視点①②の学習活動である。さらに深く震災や津波について知るために，より専門的な学習の場を設定した。総合的な学習の震災学習では、田老町漁業協同組合の方を講師として招き、学習会を行った。震災当時田老はどのような様子であったか、中学生や大人はどのように考え、行動していたか、震災当時本当に必要なものは何だったかについて学んだ。また、これからの田老に必要なものについて合わせて学ぶことができた。生徒たちもこの学習の機会を前向きに捉えており、質疑応答の時間には「震災当時の中学生はどのように地域とかかわっていたのか」「震災前の津波への認識及び防災の取り組みはどのようなものだったか」「これからの復興に向けて、中学生に願うことは何か」など、活発に質問をしていた。

## Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

・下橋中学校との交流会を通し、震災のことを深く知りこれからの生き方や、今までの取組を振り返る機会となった。

・交流学習の準備や発表を通し、震災津波の教訓を後世に語り継ぎ、復興の担い手として未来を創造していくという意識を高めることができた。

・３年生は先輩が修学旅行で行った田老を語り伝える会の様子を見ることや、交流会で震災の実際を伝える活動を通し、最高学年として見通しを持つ機会となり自覚を高める事ができた。

２　課題

・震災の記憶に乏しい生徒及び個々に被災した生徒の実態把握に努めながら、ねらいを明確にした活動を行っていくこと。